

異性愛でもなく同性愛でもなく： 欲望する／されるレベッカ¹

武 田 美保子

『レベッカ』の中の同性愛

Alfred Hitchcock の『レベッカ』(1940) が、レズビアン映画だと言ったら驚くだろうか。大抵はこの映画を一種のシンデレラ・ストーリーとみなし、典型的異性愛の物語であるとするに異論を唱えることはまずないだろう。事実この物語の大枠は、下品なアメリカ夫人のコンパニオンを勤める世間知らずの娘 (Joan Fontaine) が、ハンサムで金持ちで年上のイギリス男性 Maxim de Winter (Laurence Olivier) と出会い、求婚され結婚して彼の屋敷に移り住むが、どうやら彼も召使の Mrs. Danvers (Judith Anderson) も先妻の Rebecca が忘れられず彼女の追憶に浸って生きているように思われ、ヒロインは周りの誰もが賞賛するレベッカの影に嫉妬し、怯える、というものだ。このスリラー仕立てのロマンチック・ラブ映画はまた、ひとりの女性の成熟の過程をたどった、女性版エディプス劇と捉えることもできる。というのもヒロインは、「横暴な老女 (母親) から救い出してくれた父親代理と結婚する」という、「女性が抱く原形的なエディプスの願望を達成」するからである。だが、その際に、彼女は過去から出現する恋敵と向き合わなければならない。それは、「最初に父親を所有していた女であり、今でも手を延ばし、父親を再び所有することのできる女」なのであるから。² その限りで、先妻レベッカは、ヒロイ

1 この小論文は、南山英文学会 (1996年) において「ジェンダー批評の可能性」というテーマで行われたシンポジウムでの発表に基づいて、加筆訂正したものである。

ンにとっては一人の男の愛を奪いあうライバルに他ならない。映画の冒頭に近いモンテ・カルロの丘での場面で、ヒロインがマクシムに大声で呼びかけ、レベッカの性的放縱の表象としての砕け散る波を凝視する彼の視線を自分に向けさせようとする行為は、ある意味でこの物語全体のこうした構造を示唆しているといえるだろう。

しかしながら『レベッカ』は、一九三〇年代から四〇年代のハリウッドで量産された「女性映画」の例に漏れず、物語の進展と共に、父と娘の関係よりもむしろ母と娘の関係の方に焦点が当てられていくようにみえる。³ 生前、男たちに飼い慣らされることなく奔放に生き、死後もその影響力を Manderley の邸に及ぼしつづけるレベッカの、母的存在としての彼女の牽引力がヒロインを支配し、彼女とマクシムとの関係を脅かしているようにみえるのだ。ここでは、母と娘の関係は、しばしば父と娘の関係を危ういものにし、時には限りなく同性愛的でさえある。そしてこのような、父か母か、男か女かといった、少女の愛の対象選択をめぐるせめぎ合いのドラマは、Freud の「女性の性愛について」ですでおなじみのものでもある。フロイトによれば、男の子にとっても女の子にとっても、最初の愛の対象は母親だ。その後男の子の方は、解剖学的違い（つまり母親にはペニスがないこと）を発見し、〈去勢不安〉が生じ、母親との親密な関係を断念し、父親の介入を受け入れなければならない。そのため母親をあきらめ、父親のような男になって、母親のような女と結婚することを望むことになる。一方女の子は、去勢コンプレックスによって引き起こされた〈ペニス羨望〉によって父親との親密な関係に入っていく下地ができる。しかも女の子には、男の子の去勢不安のような母親を断念するべき強力な契機が欠

2 Tania Modleski, *The Women Who Knew Too Much*, New York & London: Routledge, 1988, 46. [T. モドゥレスキー『知りすぎた女たち』加藤幹郎他訳 青土社 一九九二年]

3 女性映画については、Mary Ann Doane, *The Desire to Desire: The Woman's Film of the 1940s*, Bloomington & Indianapolis: Indiana UP, 1987 [メアリー・アン・ドーン『欲望への欲望』松田英男監訳 勁草書房、一九九四年]を参照。

如しており、母親拘束をかかえたまま愛情の対象を父に変更するということが非常に起こりやすい。⁴ このように女性は発達の段階でいわば〈両性的〉な要素を持ち込んでしまう傾向があるわけで、女性の場合（もしも完全に100%ヘテロ（父親愛着）へと対象を変換しえるのではない限り）大なり小なりホモ（母親愛着）を引きずっているといえるのだ。『レベッカ』は、女性の中に潜むこのような異性愛・同性愛の両方の性癖のせめぎ合いが如実に窺われるという点で、女性のセクシュアリティの謎を探る格好のテキストかも知れない。それゆえここでは、この映画の分析を通じて、異性愛体制の中でわれわれはいかに同性愛の誘惑にさらされているか、というより、いかに異性愛は常にすでに同性愛と共にあるかといった点を明らかにしていきたい。また、欲望の客体として位置づけられている女が欲望の主体となりうる可能性も、レズビアン・セクシュアリティの中に探っていきたい。

レズビアン・サブジェクティヴィティに向けて

この映画の中で特に目につく同性愛的要素としては、ダンバース夫人の亡きレベッカへの常軌を逸した愛着があげられる。レベッカが身にまとった毛皮に頬ずりし、それをヒロインの頬にも押しつけるとき、また薄い夜着を広げて手招きし、ヒロインをレベッカに見立てて髪をとく仕草をしてみせるとき、ダンバース夫人はレベッカの身体のエロティシズムを身近に感じているように見える。そしてレベッカを愛する余り、ヒロインを屋敷から追い出そうとしながらも、同時に「ヒロインが自分の身体でレベッカの身代わりをするよう仕向け」⁵ ているようでもあるのだ。「奥様は、・・・あなたがた全部を笑っておいででしたよ」と小気味よさそうに語る様が示しているように、男性嫌悪（マンヘイティング）をレベッカと共有し、彼女をすべての男達の上に置くダンバース夫人の性的嗜好は、明らかに同性愛的だとみなしてよいだろう。またその当の

4 フロイト「女性の性愛について」『フロイト著作集5』人文書院、一九八二年。

5 Modleski, *The Women Who Knew Too Much*, 48.

レベッカにしても、マクシムが彼女自身の秘密の中味を明かす際の歯切れの悪さ、幸せな夫婦のふりをするという二人の取り決めについて語る語り口から、もしかすると彼女の秘密とは、単なる複数の男達との性的関係に留まらない、彼女の中のレズビアニズムであった、と解釈しうる可能性も捨て去るわけにはいかない。Daphne du Maurier による映画の原作では、マクシムがレベッカとの結婚の実体をヒロインに告白し暴露する時、レベッカは「愛も、やさしさも、良識もない」女で、「正常でさえなかった (not even normal)」と、かなりそのことを匂わせる表現がされている。⁶

しかしながらさらに問題にされるべきは、ヒロイン自身の欲望のゆくえについてであり、とりわけヒロインとマクシム、レベッカ、そしてダンヴァース夫人との関係だろう。ヒロインは、マクシムとの交際が深まる直前に、彼女の女主人と看護婦との間でかわされるレベッカのうわさ話を耳にし、どうやらマクシムが忘れられないでいるらしい彼の美しい前妻レベッカの夢にうなされる。そして彼女は、会ったこともないレベッカへの追憶にせかされるように、それ以降急速にマクシムへと傾斜していくことになる。だからヒロインは、マクシムその人を愛したというよりも、むしろ、人々がその美しさを称えるレベッカのような妻を持ち、その彼女に愛され、彼女の死後もその傷心から立ち直れないでいるマクシムのイメージをこそ愛したのだ、と考えるべきなのかもしれない。このように、ヒロインの愛がマクシムとレベッカとの間で揺れ動き巡回する様子は、先に上げたレベッカの部屋の場面に端的に窺うことができるだろう。こっそりと部屋に忍び込んだ彼女は、レベッカに惹き寄せられるかのように化粧台の上のヘアブラシに手を触れるが、その時台の上に置かれたマクシムの写真に気づき、驚いて思わずしりぞき、彼女のセクシュアリティの証しともいべきレベッカのベッドの方へ歩いていく。そこへダンヴァース夫人が姿を現わし、クローゼットからレベッカの毛皮をとりだし（一種のカムアウトのユーモ

6 Daphne du Maurier, *Rebecca*, New York: The Modern Library, 1939, 254.

〔デュ・モーリア『レベッカ』大久保康雄訳 新潮文庫、一九七一年〕

ラスな表現?)、レベッカの感触を味わうようにそれに頬ずりをした後、そのセクシュアリティを伝染させるかのようにヒロインの頬にもあてる。この「感触」の循環に、性的な誘いかけがほのめかされているのは明らかだ。(いまや枠の中にはめられ限定的な影響力しか持ちえない) マクシムの写真から遠ざかるのと対比して、レベッカのランジェリーから夜着へと引き寄せられていくこの場面は、ヒロインの父に対する牽引力よりも母への牽引力のほうが優勢であることをほのめかしている。Patricia White が指摘するように、ヒロインは、「未だそうではなく、必ずしもそうではないが、潜在的なレズビアン」であることが示唆されている、といてよいだろう。

これを証明するかのように、彼女は(無意識のうちに)徹底的にマクシムの願いを裏切り続けることになる。「黒いサテンのドレスやパールを身につけるんじゃないよ、そんなことをしたら三十六歳に見えてしまうから」というマクシムの懇願にもかかわらず、結婚早々に彼女はファッション雑誌を見てロンドンで取り寄せた黒いロングドレスとパールのネックレス姿で彼の前に現れる(これは明らかに、ヒロインがイメージするレベッカの趣味をなぞったものだ)。そして映画が終わるまでには(レベッカがそうであったように)すっかり成長を遂げ、「ああ、私の大好きだった、あのおかしな、困ったような表情は永遠に消えてしまった」と彼を嘆かせることになる。それが極まるのが、ダンヴァース夫人の助言をいれて、ヒロインが知らないうちにレベッカとまったく同じ仮装舞踏会のための衣装をまってしまうときで、知らず知らずのうちにレベッカ自身を反復してしまうヒロインの顔は、(一時的にせよ彼女と完全に一体化しその位置を占拠したことで)実に恍惚としてみえる。デュ・モーリアによる原本では、レベッカのレインコートのポケットから取り出した“R”のイニシャル入りハンカチの匂いを、「憶えのある、わたしの知っている匂い」だと

7 Patricia White, "Female Spectator, Lesbian Specter: *The Haunting*," *Inside/Out: Lesbian Theories, Gay Theories*, ed. Diana Fuss, New York & London: Routledge, 1991, 153.

感じたり、白日夢の中で完全にレベッカになりきって知らず知らずのうちに彼女の仕草としゃべり方をまね、マクシムにからかわれるなど、ヒロインのレベッカに対する欲望は、さらに明白に書き込まれている（「わたしは、すっかりレベッカになりきって、わたしという退屈な人間が、この世の中には存在せず、一度もマンダレイにきたことがないかのような気持ちになっていたからである。わたしは身も心も過ぎ去った時代にあともどりしていたのだ」）。このように、ヒロインとマクシムとの関係は徹頭徹尾レベッカの亡霊によって妨害されるため、二人の異性愛が成就するためには、ヒロインがレベッカへの同性愛的呪縛から解放されなくてはならないのだ。内心の不安と疑惑を押し隠して、「わたしたちは幸福な結婚をした」のだと言い聞かせあい、必死でそのようなふりをし合うこと無くしては保てないほど、二人の関係は崩壊の危機に瀕しているのだ。父（マクシム）と母（レベッカ）との間で引き裂かれたヒロインの、このように循環する同化と離反の身振は、次のように要約しうるかもしれない。「フォンテインのパフォーマンスはこうして、彼女の夫と彼の先妻への同時的な牽引力、彼女の奇妙な（同性愛的な）欲望を特徴づける同性愛的牽引と異性愛的牽引とに交互に介在されている」⁸、のだと。

このフィルムの名祖でありながら、全編を通じて一度も姿をみせることのないレベッカと、ヒロインでありながら一度もその名が呼ばれることのないド・ウインター夫人という、この二人のきわめて非対称な布置図は、そのまま両者の力関係をも示唆していよう。ダンヴァース夫人が感じているように、レベッカの気配はイニシャル入りの彼女の付属品に限らず邸の至るところに漂っており、レベッカは全く画面に登場しないという事実こそわれわれ観客は、逆に驚かされてしまう。カメラワークもまたこうした印象を醸し出すべく、たとえば、マクシムの口から語られる事件前夜のボート小屋での出来事の描写は、不

8 Rhona J. Berenstein, "I'm not the sort of person men marry: Monsters, Queers, and Hitchcock's *Rebecca*," *Out in Culture: Gay, Lesbian, and Queer Essays on Popular Culture*, eds. Corey K. Creekmur & Alexander Doty, Durham & London: Duke UP, 1995, 252.

在のレベッカの動きに添って移動するため、いたってその存在が強く意識されるという工夫がなされている。一方、ヒロインがあればレベッカの影に過剰に反応するのは、レベッカがいまなお夫の欲望の対象であると誤解しているからであり、またダンヴァース夫人の欲望の対象でもあるレベッカに同化することによってダンヴァース夫人の歓心をかおうとするからでもあるだろう。このように、他者の視線に映し出されるレベッカの鏡像に自己を投影するヒロインの同化と嫉妬の身振りは、明らかに彼女の「エディプス的もしくは前=エディプス的母」への愛着の反復、もしくは転位に他ならない。そして、他者の欲望を欲望することによって結果的にレベッカを欲望するこの位層において、ヒロインは、「欲望の対象」としてではなく、「欲望の主体」としてセクシュアリティに接近するのだ。つまり、ここに見られるようなセクシュアリティの客体であると同時に主体でもあるという女の位置は、Teresa de Lauretis の言葉を借りれば次のように説明しうるだろう。

鏡像を生むプリズムとしての役割を果たすヒロインを媒介に、われわれに伝えられるレベッカのイメージは、結果的には幾つかに分断され、また語りの自己同一化の位置も分断されることになる。自己イメージとしての、そしてライバルとしての「レベッカ」は、男性の欲望の対象の位置を示しているだけでなく、さらに重要なことは、女性の能動的な欲望（ダンヴァース夫人の欲望）の対象とその位置をも示している。⁹

もっとも上記の括弧内には、「ダンヴァース夫人の欲望」に加えて、「ダンヴァース夫人の欲望に欲望するヒロインの欲望」も書き添えられるべきだし、またヒロインに名前が無いのも、他者の欲望に容易に染まってしまう彼女の無彩色性に、いかにもふさわしいことに違いない。

9 Teresa de Lauretis, *Alice Doesn't: Feminism, Semiotics, Cinema*, Bloomington: Indiana UP, 1984, 152-3.

三角関係／欲望への欲望

ここで、ヒロインをめぐる以上のような三角関係の間の欲望の循環をさらに精密に検証し、照射するために、これまで多くの批評家によって論じられてきたフロイトの『夢判断』の「美しい肉屋の妻の夢」に就くことにしたい。この分析によって明らかになるのは、ジェンダーとセクシュアリティをめぐる同化と欲望の相互関係が、おおむね4つのパターンに分類しうること、またその相互関係には、何らかの形で同性愛が刻印されていることである。フロイトの知的な患者の夢は以下のようなものである。

ひとを夕飯にお招きしようと思った。しかし薫製の鮭が少々あるほかには、なんの貯えもなかった。買い物に出かけようと思ったら、今日は日曜の、しかも午後なので、お店はどこももう締まっているということ思い出した。そこで出前で届けてくれるところを2、3軒電話で当たってみようとしたけれども、電話は故障している。それでその日ひとをご招待しようというわたしの願いは諦めてしまわなければならなかった。¹⁰

この開かれなかった夕食会の背後には、頑強な肉屋の主人、ふっくらとした利口で美しい肉屋の妻、妻のやせた友人の間の三角関係が潜んでいた。肉屋は最近太り気味でダイエットに務め夕食会に呼ばれても出かけないようにしようと話していたところで、その妻はなぜか大好きなキャビアを贅沢だといって食べないように心がけ、ひどく痩せっぽちのため肥りたいと言っていた彼女の女友達はやはり同じように鮭を断っていた。この肉屋の妻は内心、夫が友人のことを日頃褒めそやしていたので彼女に嫉妬していたのだが、さいわい夫が豊満な女性を好んでいるのに、この女性の方はひどく痩せていた。だからこの夢は、友人を招待して彼女を肥らせ、彼女を夫にとってさらに魅力的にすることに手を貸したくないという、妻の無意識の願望の現れと解釈できそうなのだが、さ

10 フロイト『夢判断』『フロイト著作集2』人文書院、一九六八、一二五頁。

らに夢に出てきた友人の好きな鮭が鍵となって、この夢の中の「わたし(=肉屋の妻)」とは実は「彼女(=女友達)」のことであり、妻が友人に同化した結果、彼女は友人の願望が満たされないという夢を見たのだということが明らかにされる。そこでフロイトは、このヒステリー的転位関係で、「患者が夢の中で自分を女友達の位置に据え置いたのは、その女友達が彼女の夫においては自分の位置を占めているからであり、また、彼女が自分の夫の価値評価においてその友達の位置を占めたいと望んでいるからである」、と分析してみせるのだ。フロイトのこの夢の分析における妻の性癖については、とりあえず、「女性に同一化する異性愛者」と呼んでおくことにしよう。

これに対してLacanは、太った女が好きな夫がなぜあんな痩せっぽちの女、他の女を欲望し愛しうるのがか知ろうとした妻が、夫に同化して、女友達を欲望している夫の立場に身を置くのだと考える。そして、一切れのスモーク・サーモンは夢の中で女友達の場所にとって代わり、これに対する欲望は大文字の他者の欲望、つまりファロスへの欲望となるのだと言う。またラカンの論を受けて展開されたCatherine Clémentの議論の中では、ラカンの言う他者の欲望は妻の中で友人の欲望へとスライドして行ったのだと考え、妻の側の夫の欲望に対する同一化は、彼女の内の禁じられた同性愛的な空間を切り開いてしまうのだと指摘している。つまりその結果、肉屋の妻は、ラカン的に捉えれば「男に同化する異性愛者」だと言えるし、クレマンのように考えれば彼女は「男に同化するレズビアン」だとみなしうるわけである。

ラカン=クレマンの分析を基にしてきわめて緻密な論を展開しているCynthia Chaseはさらに、妻の側の夫への同化は、母の男根的な欲望への同化であり、きわめて同性愛的なこの関係は彼女の前エディプスの男根的母との原初における関係の反復である、つまり母的なものへ同化する幼児と位置づける一方で、Diana Fussは誰よりも大胆に、妻を「女性に同化するレズビアン」だと断定するのである。言い換えれば、そもそも夫は、単に体重を減らして妻の友人のように痩せたいと思ったにすぎないのであって、「夫が女友達に惹きつけられたのでなく」、「私が彼女に惹きつけられた」のだ、フロイトが言うように、

「嫉妬」とは「抑圧された同性愛的衝動とその衝動への防衛」の表われに他ならないというわけなのだ。¹¹ つまり、すべての異性愛の背後には同性愛が潜んでいるというのである。ここで一言ことわっておけば、これまで述べてきた女性的同化もしくは男性的同化とは、男／欲望する側、女／欲望される側という、欲望への階層的位置を表わすものでジェンダー概念に対応しており、ヘテロとレズビアンという区別は当然のことながらセクシュアリティに対応している。だがこのような階層的位置づけは、先にみた通り、他者の欲望に染まりやすく、転位を起こしやすく、それゆえ男も女も共に愛してしまうこのヒステリー-症気味の美しい肉屋の妻によって、反転され、階層的位置を揺るがされてしまう。それによって、欲望される客体としての女は、欲望の主体としての位置を占めることが可能となるのである。フロイトは、少女 Dora (Ida Bauer の仮名) に代表されるこのような両性愛的なヒステリー患者を診察することで、広大な無意識の世界の発見に至ることが可能となったし、そもそもの始めからラカンが関心を寄せたのは、彼に発見の糸口を与えてくれるこうした女性たちに限られていたと伝えられている。¹² 女性の性愛の複雑さを垣間見させてくれるヒステリー患者は、だから、他の人々が見過ごしてしまうことを特別に知感しうる能力を持ち合わせているのだといえよう。フロイトが述べているように、容易に他と同化し、転位することで引き起こされる彼女たちの症状によって、「患者は、自分自身の経験だけでなく、他の多くの人々の経験を自らの症状のうち

11 以上の議論については、Diana Fuss, *Identification Papers*, New York & London: Routledge, 1995, 27-32 に依っている。また各論については、以下のものを参照。Jacques Lacan, "The Direction of the Treatment and the Principles of Its Power," in *Ecrits*, trans. Alan Sheridan, New York & London: W. W. Norton & Company, 1977, Catherine Clément, *The Lives and Legends of Jacques Lacan*, trans. Arthur Goldhammer, New York: Columbia UP, 1983 (カトリーヌ・クレマン『ジャック・ラカンの生涯と伝説』市村・佐々木訳 青土社、一九九二年), Cynthia Chase, "The Witty Butcher's Wife: Freud, Lacan, and the Conversion of Resistance to Theory," *MLN* 102:5 (December 1987).

12 Catherine Clément, *The Lives and Legends of Jacques Lacan*, 60.

に表現することができるようになる。いわば、一群の人たちの身代わりとなって苦しむ」のだと、みなしうるのだ。¹³ また、フェミニズム批評のディスクールにおいて、ヒステリー患者の同性愛傾向の比喩的な役割に注目すれば、女性の同性愛は、先にみたように「女性の主体と欲望の可能性を表象」しえているのだ、ということにも留意すべきだろう。¹⁴

さて、ここで問題にすべきは、これまで追ってきた議論のうちのどれが正しくどれが間違っているかではなく、また映画『レベッカ』が、おおよそ4つに分類されるパターンの内のどれに属するかということでもない。むしろ問題にすべきなのは、同じ一つの現象が、少なくとも4つの可能性を孕みうることであり、程度は違ってもここには、限りなく異性愛に近いものから真性の同性愛に至るまで何らかの同性愛的感情が潜んでいる、と読むことができることだろう。こうした観点は、Eve Kosofsky Sedgwick が多岐にわたる分類を試みながら、セクシュアリティは「たとえ同じジェンダー、人種、国籍、階級、「性的嗜好」が同一の人々でも、互いに差異化することができる」ほどに多様であると主張していることとも呼応しあっているかもしれない。¹⁵ このいささかヒステリー症気味で、容易に他者の欲望に伝染し、転位を起こしやすい美貌の肉屋の妻の、そしてフォンテイン演ずるヒロインの、主客反転しあう欲望の位置は、周囲の欲望を巻き込みつつ、客体として位置づけられた女の欲望に対する主観性（サブジェクティヴィティ）への可能性を切り開いていくのである。

13 フロイト『夢判断』『フロイト著作集2』、一二七頁。

14 Teresa de Lauretis, *Practice of Love: Lesbian Sexuality and Perverse Desire*, Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 1994, 156-157. ここでド・ロウレティスは、「分析的シナリオにおけるヒステリー患者のように、レズビアンという比喩はこんにちのフェミニスト言説においては、女の主体と欲望の可能性を表象している。彼女は主体としての位置を失うことなく、誘惑し、誘惑されうるのだ」と言っている。

15 Eve Kosofsky Sedgwick, *Epistemology of the Closet*, Berkeley: U of California P, 1990.

アブジェクトとしてのレベッカ

再び議論を『レベッカ』に戻そう。父権的枠組みの中ではこれまで、男たちは、女たちを互いに嫉妬という名のもとで敵対させることによって、自らの安泰を保ってきたし、この映画も従来は、先妻に嫉妬するヒロインの物語とのみ考えられてきた。Trinh T. Minh-ha は、この「女のあいだの嫉妬」と呼ばれるものを、女から女へと文化を伝えていく女たちの連続体を切断するものとし、「分割して支配する」、つまり下位に位置する者同士を互いに敵対させることによって上位の者が統治するという、父権的かつ植民地主義的な企てと捉えるのだが、¹⁶ ジェンダーの問題に限っていえばこの企てが、何よりも父権的異性愛体制を温存し強化するためのものであることは間違いないだろう。それゆえ、前＝エディプス期における女性への愛着を喚起してしまう、魅惑的なレベッカの存在こそは、異性愛体制を脅かすものであり、そのためにこそ抹殺されなくてはならない。レズビアニズムを覚醒し異性愛を妨害する彼女は、最終的には忌まわしいもの（アブジェクト）として物語の外部に排除（アブジェクト）されなくてはならない。物語の最後になって明らかにされるのは、実はマクシムはレベッカを愛していたのではなく、性的に放縦であった彼女を憎んでいたこと、また他の男の子供を妊娠したと告白した（これは嘘で本当は悪性の癌にかかっている余命いくばくもないことを彼女自身知っていたことが後に判明する）レベッカが、マクシムの怒りをかうよう挑発して自らを殺させようとしたこと、マクシムはカッとになって彼女の頭を殴り、その拍子に転んで頭を打って死んでしまった彼女の死体をボートとともに沈めたこと、などが明らかにされる。女性の理想としての3B（breed, brain, beauty）を備えた彼女、勇敢で、男たちをあざ笑いつつ、父権制度を揺すぶる彼女のその奔放なセクシュアリティは、

16 Trinh T. Minh-ha, *Woman, Native, Other*, Bloomington & Indianapolis: Indiana UP, 1989, 132. (トリン・T・ミンハ『女性、ネイティブ、他者』竹村和子訳 岩波書店、一九九五年)

豊穡の証しとしての赤ん坊の代わりに癌という不毛の病を与えられることによって、罰せられ、その魅惑を剥ぎとられなくてはならない。なぜなら父権制度は、Monique Wittig が指摘するように、「異性愛」という「女性に押しつけられた義務としての再生産の機能と、その再生産の専有化とに基づいた社会的独占のシステム全体を正当化」し、「再生産の目的を持ったセクシュアリティ」だけしか規範として認めず、「それ以外のものはすべて逸脱である」として排除するイデオロギー・システムに他ならないからだ。¹⁷ Judith Butler 流に言えば、ヘテロは、ホモをアブジェクトとして排除することによって支えられているが、常に自らが排除したもの（ホモ）に取りつかれているのだ、ということになるだろう。¹⁸

とは言うものの、この物語がヘテロ体制の完全な凱旋によって幕を閉じると考えるのは、あまりにも一元的に過ぎるかもしれない。ヒロインのナレーションで始まる冒頭の場面を振り返って見れば、レベッカ的なるものの持つ自然な繁殖力がそれほど簡単に破棄（アブジェクト）され押え込まれるものでないことが分かるだろう。ヒロインは、いまはもうダンヴァース夫人の手によって焼失してしまっているはずのマンダレーの邸に、昨日見た夢の中で舞い戻っていく。入り口の鉄格子は閉じられ中に入ることができないが、いつのまにか不思議な力（supernatural power）を得て幽霊（spirit）のようにそこを通り抜けることができる。よく見ると、昔は手入れの行き届いていた車道にはいつのまにか「自然」の力が栄え始め、雑草が生い茂っているのだ。そしてうねるように長く続く車道の先には、レベッカの化身そのものとも言うべきあのマンダレーが、「完璧な均衡」を保ったその姿を現わし、まるで今もその活力を失っていないかのように、窓からは光りが射している。と、思う間に、幻影は消え後には廃虚が残るばかり。「わたしたちはもうそこに戻ることはできない」、けれど

17 Monique Wittig, "Paradigm," *Homosexualities and French Literature*, eds. George Stambolian & Elaine Marks, Ithaca: Cornell UP, 1979, 114-121.

18 Judith Butler, *Bodies That Matters*, New York & London: Routledge, 1993, 3.

も、「夢の中で、わたしはそこに戻っていく」のだと、ナレーションは続く。「わたしたち」とは、ヒロインとマクシムのことだろうか、それともヒロインとレベッカか。これまでの議論から、われわれは共にその可能性を捨て切ることにはできない。ただどちらにしるヒロインは、少なくとも夢の中ではレベッカの超自然的かつ霊的な力が自在に猛威をふるうマンダレーへと回帰していくのだ。レベッカの強い感染力を持った魅惑と牽引は、猛威をふるうべく、じっとその機会を狙いすましているかのようなのだ。

これまで、同性愛はしばしば、病気もしくは汚染のメタファーで語られてきた。たとえば、近年同性愛テキストとしての読み直しが盛んな Bram Stoker の『ドラキュラ』(1897)。ここでは、男たちはあたかも愛する女たちを墮落と感染から守るべく、結束して吸血鬼退治へと繰りだしていくが、実はその吸血鬼こそが男たちの抑圧された同性愛的欲望の表象であると読みうる可能性をテキストは示唆している。¹⁹ つまり吸血鬼退治とは、異性愛の偽装のもとに、自らの内なる同性愛的欲望を否認し、排除する身振りに他ならない。それゆえ異性愛は、「汚染された他者である同性愛の絶えまない略奪と侵入から自らを守ることによって、存在論的な境界線を支え、自らの存在証明を保持してきた」²⁰のだと言ってよいだろう。逆に言えば、かれらのこうした必死の排除の身振りこそが何よりも、レベッカの魅惑がそうであったように、われわれの内なる同性愛的希求の強さ、その回帰する力の大きさを物語っているのかもしれない。

19 吸血鬼を男性同性愛の観点から分析したすぐれた『ドラキュラ』論として、谷内田 浩正「ホモセクシュアル・パニックー『ドラキュラ』と世紀転換期イギリスにおける同性愛（前・後篇）」『イマージュ』一九九五年十一月、一九九六年三月がある。その他に、Christopher Craft, "Just Another Kiss: Inversion and Paranoia in Bram Stoker's *Dracula*," *Another Kind of Love: Male Homosexual Desire in English Discourse, 1850-1920*, Berkeley: U of California P, 1994, 71-105, Ellis Hanson, "Undead," *Inside/out*, 324-340、などを参照。

20 Diana Fuss, "Inside/Out," *Inside/Out*, 2.

「新しい女」第二世代の脅威

最後に付け加えておけば、『レベッカ』の歴史的背景には、20年代、30年代という、ニュー・ウーマンたちの全盛期の活躍に対する反動期、つまり「新しい女」第二世代を取り巻く時代思潮を窺うことができるだろう。Carroll Smith-Rosenbergの伝えるところでは、共同体を築き、女性の社会的自由と平等を求めて闘った1890年代から1920年の初代「新しい女」たち間の関係は、多分に友愛的であるとみなされ、たとえ幾分かは脅威的であってもまだまだ賞賛の対象とされたのが、第二世代になると次第に脅威的とみなされるようになり、彼女たちの価値を下落させるために公然と「レズビアニズムの嫌疑」がかけられるようになる。物語がヘテロ体制へと再編成されるために最後は罰せられるレベッカの、過度の価値の下落も、当時の気分を大いに反映している、とみなすべきなのだろう。²¹ただ少なくともこのことは、従来ホモフォビアはもっぱら男性の同性愛に限られていたのが、女性の同性愛も危険視される程に当時の女性たちが力を持つようになった証し、と考えるべきなのかも知れないが。

21 Carroll Smith-Rosenberg, *Disorderly Conduct: Vision of Gender in Victorian America*, New York: Knopf, 1985, 281.